

平成30年度・令和元年度・令和2年度

研究紀要

社会に開かれた教育課程の検討

～基本的な考え方の整理と指導内容等の検討を通して～

令和3年2月



長崎県立佐世保特別支援学校

## はじめに

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症に対する対応で、これまでにない特別な一年になりました。

4月の臨時休業にはじまり、学校行事の見直しや開催時期の変更、学習活動の工夫など、児童生徒にとっては、学校生活のリズムを整えることが大変な一年でした。

教職員にとっても多くの苦労がありました。

感染防止対策による学習活動の工夫、単元計画の修正などもありましたが、なにより、普段行っている、教員同士でのコミュニケーションが思うようにできなかった一年間でした。授業後のわずかな時間のやり取りなどは授業評価の大切な時間ですが、授業後の感染防止対策が加わることで、そのわずかな時間を作ることに工夫が必要でした。また、マスクを着けた状態では児童生徒の表情がつかみにくかったり、教職員は表情で児童生徒に気持ちを伝えることが難しかったりしました。

職員の研修活動においても、例年行われ、多くの教員が参加している長崎県特別支援教育研究大会や長崎県肢体不自由教育研究会など多くの研究会などが中止だったり、集合研修ができなかったりしました。また、オンライン研修など研修のスタイルが大きく変化した年でした。

教員は、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めることが求められます。今年度は感染防止対策等により、多くの障壁があった年でしたが、佐世保特別支援学校の教職員は、児童生徒のそれぞれの実態に応じた指導の充実を目指し、ひたむきに研究活動に取り組みました。

佐世保特別支援学校では、平成30年度(2018年度)から令和2年度(2020年度)まで「社会に開かれた教育課程」の完成を目指して研究に取り組んできました。

一年次には、新しい学習指導要領を読み込み、理解を深めました。そして、単元別指導計画表の作成に向け、「育てたい力・身に付けてほしい力」の検討を行いました。

二年次には、「育成すべき資質・能力」の三つの柱などを踏まえた目標や学習内容の設定、評価規準の検討などを行い、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業づくりを研究しました。

そして、三年次の今年度は、「単元別指導計画表」を基にした授業実践に取り組み、単元や題材の目標・内容を再検討し、教育課程編成に生かすという、カリキュラム・マネジメントの好循環を産み出す仕組みづくりに取り組みました。

本書は3か年の研究の成果をまとめたものです。研究を行えば行うほど、反省材料も多く、研究の道は無限に続きますが、私たちはこの3か年の研究成果を生かし、これからも「よりよい授業」づくりに取り組んでいきたいと考えています。

どうぞ、御一読いただき、御指導・御助言をいただければ幸いです。

## 目 次

はじめに

- 第1章 研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 1～10
- 第2章 知的障害教育部門小学部の研究・・・・・・・・ 11～20
- 第3章 知的障害教育部門中学部の研究・・・・・・・・ 21～34
- 第4章 知的障害教育部門高等部の研究・・・・・・・・ 35～39
- 第5章 肢体不自由教育部門Ⅲ課程の研究・・・・・・・・ 40～49
- 第6章 肢体不自由教育部門Ⅳ課程の研究・・・・・・・・ 50～59
- 第7章 北松分教室の研究・・・・・・・・・・・・・・・・ 60～63
- 第9章 上五島分教室の研究・・・・・・・・・・・・・・・・ 64～69

おわりに

# 第1章 研究の概要

## 1 全体研究テーマ

「社会に開かれた教育課程」の検討

～基本的な考え方に基づいた指導内容等の整理と、『単元別指導計画表』を活用した授業づくり～（三年次・最終年度）

## 2 研究テーマ設定の理由

(1) これまでの研究について

本校では、先行研究において、本校児童生徒の目指す姿と、その姿に近づくために必要な「育てたい力・身に付けてほしい力」の検討をしてきた。先行研究では、小学部、中学部、高等部の各段階で「どのような力を育てたいのか・身に付けてほしいのか」を明確にし、小学部、中学部、高等部と一貫性、系統性のある指導を行うことを目的としていた。しかし、部門によっては内容の検討ができていなかったり、個別の指導計画や授業に反映するところまでには至っていなかったりした。また、「何を指導すべきなのか」「どのように指導すべきなのか」が明確になっていない状況にあり、このことが本校の課題でもあった。

本校の課題の背景には以下の3点が考えられる。

- ①「各教科等を合わせた指導」の指導目標や指導内容が「単元（題材）ありき」で、単元で取り扱う各教科等の指導内容が適切に整理されていない。
- ②①における指導内容は、各部署単位で構成されているため、小学部から高等部までの指導内容のつながりが不透明である。
- ③「育てたい力・身に付けてほしい力」の内容を実際に授業に反映させ、評価するシステムの構築が図られていないため、内容を検証する必要がある。

このような課題を解決するためには、新学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成や授業実践、授業改善を進める必要がある。また、特別支援学校学習指導要領の知的教科の教育内容に示された「育成を目指す資質・能力」の三つの柱を踏まえた目標や評価規準を設定し、指導内容等を整理する必要がある。そして、指導内容等が整理された一覧表を授業で活用しながら、その内容を検討したり、授業を改善したりすることが、本校の「社会に開かれた教育課程」編成につながっていくと考える。

○「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」一覧表（平成21～24年度研究）

【あたご部門（知的障害教育部門）】高等部卒業後に必要な育みたい力を教員の話合いを基に集約し、「一般就労」「福祉的就労」「生活介護」に分類、わかぐす部門のⅢ課程で作成されていた「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」一覧表を基に研究企画会で作成した。（小学部・中学部、高等部の2枚構成）【資料1～2参照】

【わかぐす部門（肢体不自由教育部門）】高等部卒業後に目指す姿を本校の「目指す児童生徒像」から各類型で設定した。その姿に近づくために必要な力を教員・保護者・児童生徒それぞれの立場からのアンケートを集約し、各部経営目標の6項目で分類し、小中高の各段階に振り分けた。また、平成28年度から平成29年度研究において、先行研究の内容の見直しや卒業後に利用する関係機関の聞き取り等を踏まえ再整理した。また、名称を「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」一覧表とした。（Ⅰ・Ⅱ課程、Ⅲ課程、Ⅳ課程の3枚構成）【資料3～5参照】

※Ⅰ課程（準ずる教育課程）・Ⅱ課程（下学年・下学部代替の教育課程）、Ⅲ課程（知的障害者を教育する特別支援学校の各教科に替えた教育課程）、Ⅳ課程（自立活動を主とする教育課程）

(2) 新学習指導要領改訂までの経緯と基本的な考え方

文部科学省は、特別支援学校学習指導要領等の改訂のポイントを基本的な考え方と教育内容等の主な改善事項の二つで内容を示している。新学習指導要領における基本的な考え方は次の4点である。

- ① 社会に開かれた教育課程の実現
- ② 育成を目指す資質・能力の明確化
- ③ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進
- ④ 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立

① 社会に開かれた教育課程の実現

「答申」では、学校が社会や世界の動きに関心を払い、様々な人々とのつながりを保ちながら学ぶことのできる開かれた環境であることを求め、教育課程も社会とのつながりを大事にすることを指摘している。よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、両者が連携・協働して、これからの時代に求められる教育を実現していくことが求められている。

② 育成を目指す資質・能力の明確化

育成を目指す資質・能力に関連して、「答申」は、自立した人間として主体的に学びに向かい人生を切り拓いていくための必要な「生きる力」を資質・能力として具体化し、それらを身に付けることを目指す教育課程の枠組みを示した。その育成を目指す資質・能力として具体的な三つの柱が示された。

③ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進

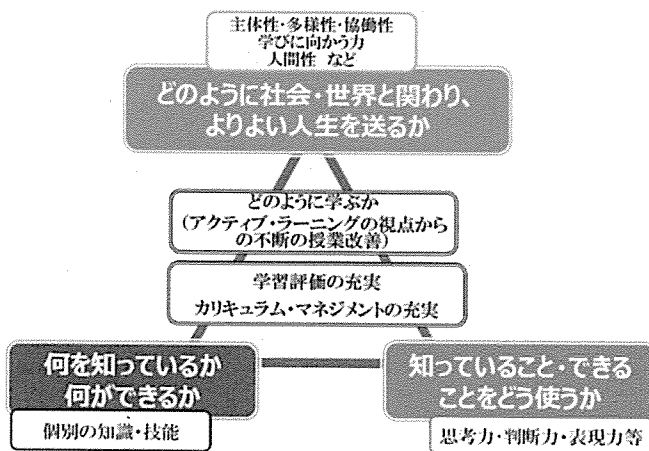
「答申」は学びの質を高めていくために、授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」が重要であると指摘している。三つの柱に整理された「資質・能力」を身に付けていくためには、学びの過程において子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げたりしていることが重要になってくる。

④ 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立

新学習指導要領解説において、カリキュラム・マネジメントとは、「各学校においては、児童又は生徒や学校、地域の実情を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」と定義し、カリキュラム・マネジメントの充実に努めることを求めている。

(3) 育てたい資質・能力の三つの柱

新学習指導要領において育成を目指す資質・能力の三つの柱として、①生きて働く「知識・技能」(何を知っているか、何ができるか)の習得、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」(知っていること・できることをどう使うか)の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)の涵養を位置付けている。



#### (4) カリキュラム・マネジメントについて

今回の改訂において、カリキュラム・マネジメントは「児童又は生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」と定義されている。

新学習指導要領において、カリキュラム・マネジメントは、三つの側面から整理して示されている。

- ① 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと  
教育課程の編成に当たっては、学校の教育目標の設定、指導内容の組織及び授業時数の配当が基本的な要素になる。その際、各教科等の内容相互の連携を図ることや、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を教育課程の中で適切に位置付けていくことなどが重要である。
- ② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと  
教育課程を編成し、実施、評価、改善のプロセスが循環するようしていくことが求められている。児童生徒に何が身に付いたかという学習の成果を的確に捉える方法や、いつ、誰が、どのように評価・改善に取り組むかを明確にした組織づくり、各プロセスで必要なツール等については、各学校の創意工夫によって具体的な仕組みを構築していくことが重要である。
- ③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと  
校内においては、実践的リーダーを中心とした学校の運営組織を生かし、それぞれの分担に応じて教育課程に関する研究を重ね、創意工夫を加えて編成や改善を図っていくことが求められている。また、社会に開かれた教育課程の理念に基づき、地域の教育資源や学習環境などについて具体的に把握して教育課程を編成するとともに、地域でどのような子どもを育てるかといった目標を共有し、地域とともにある学校づくりが一層効果的に進められていくことが期待されている。これらに加え、新学習指導要領においては、「個別の指導計画の実施状況の評価と改善を、教育課程の改善と評価につなげていくこと」も述べられている。

新学習指導要領等においてカリキュラム・マネジメントとは、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと」と定義している。

教育課程の実施と学習評価に関する具体的なカリキュラム・マネジメントの視点としては、各教科等の指導に当たって①「知識及び技能」が習得されるようにすること、②「思考力、判断力、表現力等」を育成すること、③「学びに向かう力、人間性等」を涵養することが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと、その際、各教科等の「見方・考え方」を働かせ、各教科等の学習の過程を重視して充実を図ることが求められる。

#### (5) PDCA サイクルについて

各学校では、実施した授業や単元等の指導計画、個別の指導計画、年間指導計画の評価が行われ、日々の授業改善や次年度の教育課程編成に生かされる。この営みは、計画(P)－実施(D)－評価(C)－改善(A)の過程が循環する仕組みとして示される。年間指導計画等の作成、日々の授業の実施、授業や単元等の評価、次年度の実践に向けた年間指導計画等の改善といった取組が、どのような周期のPDCAサイクルに基づくか教師間で共有することが、学校全体でカリキュラム・マネジメントの充実を図る第一歩となる。

#### (6) 佐世保特別支援学校の「社会に開かれた教育課程」について

令和元年度のカリキュラム・マネジメント推進委員会において、学校長の方針の下、佐世保特別支援学校の「社会に開かれた教育課程」の捉えを明確にした。「佐世保特別支援学校のカリキュラム・マネジメント（概念図 Ver. 2）」

- ① 「よりよい（共生）社会（創り）につながる教育課程」  
⇒社会と学校が目標を共有できる  
〈誰もが暮らしやすく、自分の役割を果たす喜びが実感できる社会創りに貢献する教育課程〉

社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標をもち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくことが重要。

- ② 「豊かな人生（創り）につながる教育課程」  
 ⇒社会（世界）に向き合い人生を切り拓くための資質・能力を育む教育課程  
 <社会に向き合い自分らしい豊かな人生を送るための資質・能力を育成する教育課程>

これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくことが重要。

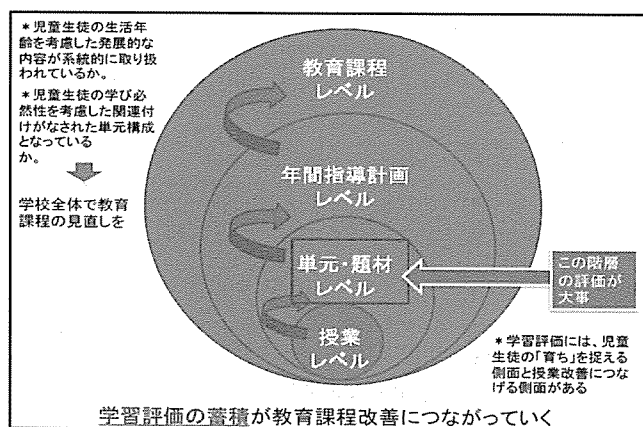
- ③ （今と未来の）地域社会につながる教育課程  
 ⇒地域社会（人的・物的資源等）との連携により学校教育の目標実現を目指す教育課程  
 <社会とつながる教育課程（社会と直接的・間接的につながりながら上記①②を実現する教育課程）>

教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが重要である。

### (7) 単元・題材レベルの評価の重要性

一年次（平成30年度）の講師招聘研修会では、植草学園大学菊地一文准教授を招いて「新学習指導要領とキャリア教育」というテーマで講義を受けた。菊地准教授からは「単元別指導計画表」について、次の2点の評価を得た。

- 「単元別指導計画表」は「育成すべき資質・能力」の三つの柱や本校の「育てたい力」（卒業後の進路・生活を見通した必要な力）という教科等横断的な視点で整理され、授業づくりをする際の良いツールになる。
- 【図1】の資料に示すとおり単元・題材レベルにおける学習評価の蓄積が授業改善や教育課程編成に大きくつながっていくことから、「単元別指導計画表」を生かした授業改善は非常に有効であるという評価を得た。



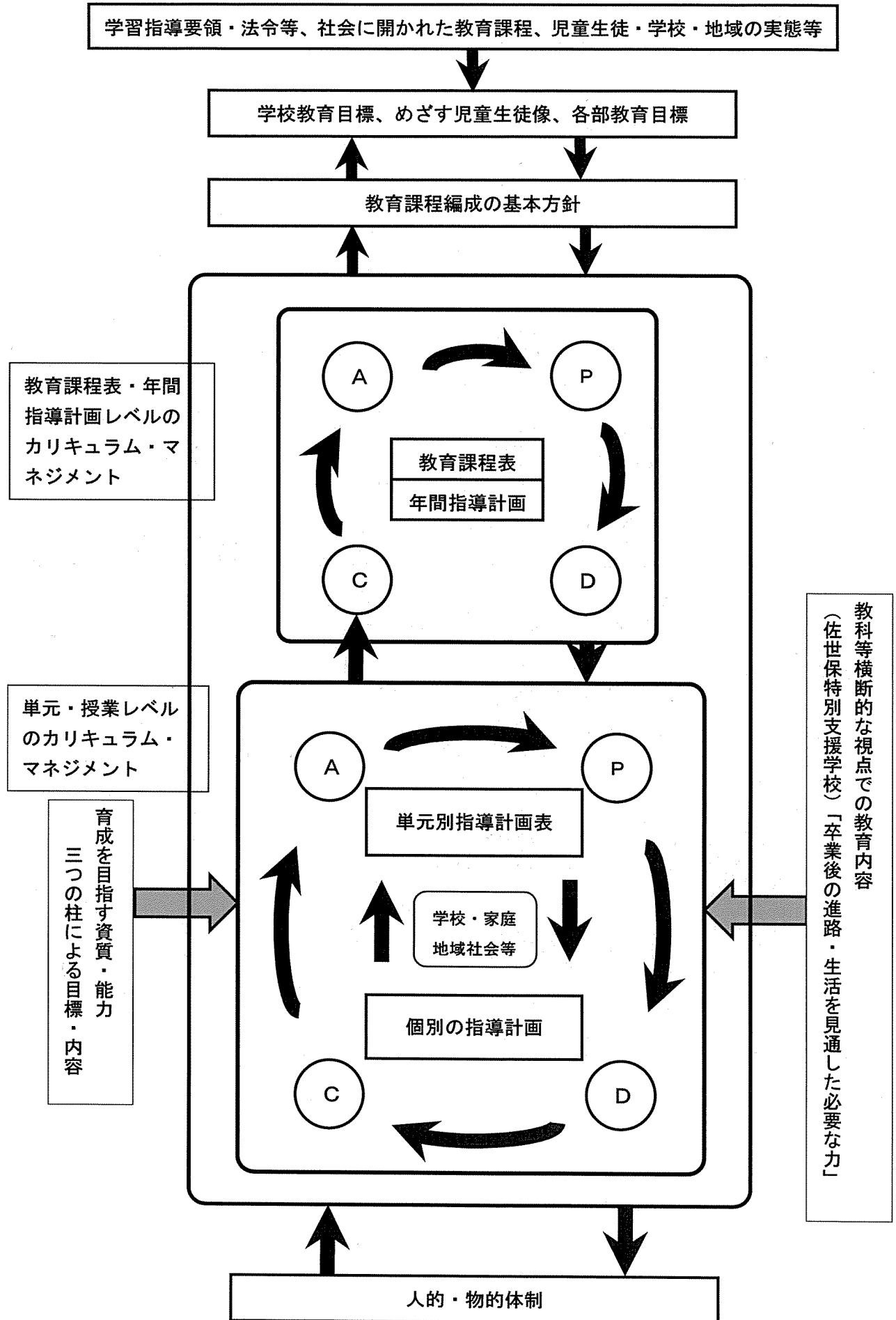
【図1】講師招聘研修会資料（菊地）

### (8) 研究テーマについて

学習指導要領に示された「社会に開かれた教育課程」を実現していくためには、特別支援学校学習指導要領の知的教科の教育内容に示された「育成を目指す資質・能力」の三つの柱を踏まえた目標や評価規準を設定し、指導内容等を整理する必要がある。また、単元・題材レベルの学習評価を蓄積し、授業内容を検討したり、授業を改善したりすることが、教育課程全体の改善につながり、本校の「社会に開かれた教育課程」編成につながっていくと考え、本テーマを設定した。



佐世保特別支援学校のカリキュラム・マネジメント（概念図 Ver. 2）



### 3 研究の目的

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、本校の基本的な考え方を明確にし、「育成すべき資質・能力」を身に付けさせるための指導内容等を整備する。

### 4 研究の内容と方法

(1) 一年次は、「社会に開かれた教育課程」の編成に向け、以下の4点について研究を行った。

- ①各指導形態の単元（題材）ごとに含まれる各教科等の指導内容を学習指導要領の「育成を目指す資質・能力」の三つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）で整理し、本校の「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」を踏まえた「単元別指導計画表」を作成する。
- ②児童生徒の実態や、児童生徒本人・保護者・地域住民の意向、卒業生の進路先や福祉事業所からの要望（学校時代に「育成してほしい力」等）などについて把握（学校評価の結果の反映・必要に応じてアンケート調査等を実施）し、本校における「育てたい力・身に付けてほしい力」を作成する。
- ③学習指導要領総則に係る自主・校内研修や「新学習指導要領とキャリア教育」に係る講師招聘研修会を実施する。
- ④「社会に開かれた教育課程」に関する先進校視察による情報収集と報告会を実施する。

(2) 二年次では、「育成すべき資質・能力」の三つの柱や本校の「育てたい力」を踏まえた目標や学習内容の設定、評価規準の在り方の検討（「単元別指導計画表」の再考）及び主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業づくりを研究した。

- ①国語科・算数科（数学科）、生活単元学習（肢体不自由教育部門）を中心に単元別指導計画表を作成する。
  - ②単元の目標設定では、「育成を目指す資質・能力の三つの柱」を新学習指導要領の指導すべき内容一覧表のどこに基づいているか記述することで、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実」を明確に記す。
  - ③単元別指導計画表を基にした授業を実践することで、授業計画や次年度に向けた授業の評価（振り返り）のツールとして活用する。
  - ④単元別指導計画表を作成しながら、研究授業・授業研究会を実施する。
  - ⑤「単元別指導計画表作成マニュアル ver. I」を作成する。
  - ⑥卒業後に目指す姿・卒業後の進路・生活を見通した必要な力』（教育支援部・進路指導部）を単元別指導計画表に記入した上で作成する。
  - ⑦知的障害教育部門高等部においては、部の指導内容一覧表に基づき、高等部の指導内容表の作成を行い、コース制実施に伴う年間指導計画の再検討・見直しを行う。
- (3) 三年次では、引き続き単元別指導計画表の作成を継続し、「社会に開かれた教育課程」の完成を目指す。

- ①知的障害教育部門は、国語科・算数（数学科）以外の教科において、新たに単元別指導計画表の作成を行うことにした。

部門・部	新たに単元別指導計画表を作成した教科
知的障害教育部門小学部	体育科
知的障害教育部門中学部	音楽科、美術科、保健体育科
知的障害教育部門高等部	職業

肢体不自由教育部門は、ほぼ全教科単元別指導計画表を作成しているため、授業実践をしながら不足している分を作成していく。また、単元別指導計画表を活用した授業実践として算数・数学科の研究授業及び授業研究を行い、その授業評価を教育課程・年間指導計画の編成へ具体的にどのようにつなげていくかについて検討を行うことにした。また、単元別指導計画表において記入している「卒業後の進路・生活を見通した必要な力」から、小学部から高等部までの12年間の学びの道筋をどのように考えるかについて検討を行うことにした。

- ②単元別指導計画表を活用・運用しやすくするため、各部で様式の再検討を行う。
- ③単元別指導計画表に基づく研究授業を行うことで、単元別指導計画表の書き方や活用の仕方、次年度へ向けての改善、年間指導計画への生かし方等について理解を深める。
- ④「単元別指導計画表作成マニュアル ver. I」を見直し、高等部の見方・考え方を取り入れた新たなマニュアル ver. IIを発行する。

- ⑤ 知的障害教育部門高等部においては、部の指導内容一覧表に基づき、高等部の指導内容表の作成を行い、コース制実施に伴う年間指導計画の再検討・見直しを行う。

※本研究は、本校知的障害教育部門小学部、中学部、肢体不自由教育部門小学部、中学部、高等部、本校知的障害教育部門高等部、北松分教室、上五島分教室で適宜、連携、協力しながら進める。

## 5 研究の経過

(一年次・平成30年度)

月	研究会	研究企画会
4月	学習指導要領総則の読込み、アンケート実施	会の趣旨説明
5月	全体研究会(研究内容説明)	各部作業計画作成
6月	4月のアンケートについてのグループ研究会	単元別指導計画様式検討
7月 ～ 12月	全体研究会(「単元別指導計画表」作成手順の説明) グループ研究会	講師招聘研修会計画 「育てたい力・身に付けてほしい力」の検討 研究概要共通理解
1月 ～ 2月	講師招聘研修会 テーマ「新学習指導要領とキャリア教育」 講師：菊地一文氏(植草学園大学発達教育学部准教授) グループ研究会 出張報告会(先進校視察) 広島県立三原特別支援学校、東京都立小平特別支援学校	

(二年次・令和元年度)

月	研究会
4月	○昨年度の研究、今年度の研究について、全体研究の概要説明 ○単元別指導計画表の説明、各部・各部門において協議
5月	○各部・各部門で国語科・算数科(数学科)を中心に単元別指導計画表を作成
6月	○単元別指導計画表に基づく公開授業・授業研究会を実施する ○12月までに各部門・各別で研究授業を実施
7月～1月	○講師招聘研修会 テーマ：「特別支援学校における「主体的・対話的で、深い学び」について」 期日：11月25日(月)本校プレイルーム 講師：長崎県教育センター教育支援研修課 特別支援教育研修班 係長 伊藤公裕先生 指導主事 山田政博先生 ○単元別指導計画表マニュアル検討・作成(1月)
2月～3月	研究のまとめ製本・配付 出張報告会(単元別指導計画表マニュアル説明)

(三年次・令和2年度)

月	研究会
4月	○昨年度の研究、今年度の研究について、全体研究の概要説明 ○単元別指導計画表の説明、各部・各部門において協議
5月	○各部・各部門で国語科・算数科(数学科)以外の教科において単元別指導計画表を作成
6月	※肢体不自由教育部門は算数(数学科)の研究授業を実施、小学部から高等部までの学びの道すじを検討
7月～1月	○単元別指導計画表に基づく公開授業・授業研究会を実施する ○12月までに各部門・各別で研究授業を実施 ○研究のまとめ・単元別指導計画表マニュアル検討・作成(1月)
2月	○講師招聘研修会 テーマ：「特別支援学校における「カリキュラム・マネジメント」について」(仮称) 期日：2月22日(月) 講師：長崎県教育センター研修部副部長 川波 寿雄 先生

## 6 三年次（最終年度）の研究成果と今後の課題

本研究は、新学習指導要領に基づき「社会に開かれた教育課程」を実現するため、単元別指導計画表の作成を行った。三年次（最終年度）の研究成果として挙げられることと課題について、以下にまとめる。

### (1) 単元別指導計画表について

各部門・各都府で、一・二年次は国語科・算数科（数学科）・生活単元学習（肢体不自由教育部門IV課程）の単元別指導計画表の作成に取り組んだ。三年次（最終年度）は各部において各教科に広げ、知的障害教育部門小学部は体育科、知的障害教育部門中学部は美術科・音楽科・保健体育科、知的障害教育部門高等部は職業科の単元別指導計画表の作成を行った。その結果、単元別指導計画表を作成していくことは、授業改善や個別の指導計画、年間指導計画、教育課程の改善に生かすツールとなり、単元・授業レベルにおけるカリキュラム・マネジメントの確立につながった。また、単元別指導計画表に基づく研究授業を行い、「育成を目指す、資質・能力の三つの柱」について検証することができた。

#### ○単元別指導計画表を作成する意図・目的について

新学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」の実施及び実現を目指して、指導内容を整理し「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れて授業改善を継続させ、育成を目指す資質・能力を着実に身に付けさせるため、単元別指導計画表を作成する。

単元別指導計画表を作成・運用することは、各授業や個別の指導計画の「計画（Plan）－実践（Do）－評価（Check）－改善（Action）」の好循環を生み、教育活動の質を向上させ、カリキュラム・マネジメントを行う上で最も重要な役割がある。カリキュラム・マネジメントの視点としては、各教科等の指導に当たって、①「知識及び技能が習得されるようにすること」、②「思考力、判断力、表現力等を育成すること」、③「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の三つが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと、その際、各教科等の「見方・考え方」を働かせ、各教科等の学習の過程を重視して充実を図ることが求められる。単元別指導計画表を作成・運用していくことは、授業改善や個別の指導計画、年間指導計画に反映するため、まさにカリキュラム・マネジメントであると言える。

※単元別指導計画表を作成することで、次年度に向けた授業改善、年間指導計画の改善につながる。また、個別の指導計画等、教育課程全体にも改善は波及し、教育活動の質を向上させる好循環を生み出す。結果的に教育課程全体の改善につながる。（＝カリキュラム・マネジメント）

### (2) 単元別指導計画表マニュアルについて

二年次に「単元別指導計画表のマニュアル ver. 1」を作成した。単元目標では「育成を目指す、資質・能力の三つの柱」を基に設定することで、単元や題材の学習内容や学習活動を検討しながら、児童生徒の「主体的・対話的で、深い学び」の実現に向けた授業改善を行うようにした。また、「見方・考え方」を記入する項目を設定することで、各教科の見方・考え方を児童生徒が働かせ、深い学びが実現（授業改善）するよう授業を行う意図を明確に示すことができるようにした。

単元評価については評価規準を示し、単元においての児童生徒の目指す姿を記した。授業の反省については、項目名を「次年度に向けて」という書き方にした。改善点があるのかを分かりやすく示すため、「◎○△」で評価するようにした。そして、「見方・考え方」「育てたい力」の項目を新たに設定し、単元や授業でどのように効果があったのか記述するようにした。

三年次の研究では各部の状況に応じて単元別指導計画表を書きやすく、使用できるよう各部で書式を変更してよいことにした。そのため、各部で検討した書式をマニュアルに例として添付した。

### (3) 講師招聘研修会から

令和元年度の講師招聘研修会では、長崎県教育センターが考案した「単元構想シート」を活用した「主体的・対話的で、深い学び」を視点とした授業改善の具体例が示され、以下の4点を基に単元を構想するとよいことが分かった。①単元の設定において、児童生徒に身に付けさせたい資質・

能力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」を明確にすること。②児童生徒が働かせる「見方・考え方」を明確にすること。③児童生徒が「見方・考え方」を働かせるために、必要な「問い（発問）」を明確にすること。④「単元構成」において、「深い学び」の実現に向けさせるために仕組む「主体的な学び」「対話的な学び」を明確にすることが重要であることが分かった。単元別指導計画表を作成する上で、非常に参考になる研修であった。

#### （４）「単元別指導計画表」の現状と課題

単元別指導計画表を作成する利点としては、その単元における題材の計画と学習活動が明確になり、単元全体を見通すことができる。また、新学習指導要領の三つの柱に基づいた目標・評価の設定ができることで、「何を学ばせたいか」等の学習のねらいが明確になった。また、教員間で授業の目標や手立て等を共有することができ、教員間の連携ツールにもなっている。そして、新年度に授業者が変わっても単元のねらいがぶれにくく、前年の授業内容を生かすことができる等の利点が上げられる。「見方・考え方」については様式を改訂し、授業の意図やねらいが明確に分かるように記入する項目を設定した。

今後の課題として、カリキュラム・マネジメントを考えたとき、単元別指導計画表は基本的に全ての教科・授業において必要である。今後、毎年少しずつ作成する教科を増やしていき、完成を目指したい。三年次の研究では各部の授業形態や業務の進め方等を考慮し、単元別指導計画表を各部で運用・活用しやすくなるよう様式の変更を可能とした。今後、全ての教科・授業において作成していくことを考えると、各授業担当者の負担が大きくなることが予想される。その結果、本校のカリキュラム・マネジメントで最も重要である単元別指導計画表の作成が滞り、単元別指導計画表の作成に支障をきたす可能性がある。これでは単元別指導計画表を作成する本来のねらいや趣旨に反し、十分活用されているとは言い難く、カリキュラム・マネジメント（PDCA サイクル）の好循環に影響を及ぼす可能性がある。実際、二年次に行った単元別指導計画表のアンケートでは、作成することへの負担を感じる教員が多いことが分かった。そこで、各部で作成した様式について全校で集約し、シンプルで書きやすく、使いやすい様式に再検討する必要がある。確かに新たに作成する際は負担に感じることもあるが、単元別指導計画表を一旦作成しておけば、次年度からは修正・見直しをするだけで活用することができ、昨年度の反省を踏まえて次年度の授業に積み上げることができるため、単元別指導計画表を作成する意味や重要性を改めて実感できるのではないと思われる。

今後、様式を統一する際には、項目や文言についても整理する必要がある。特に「学習内容」と「学習活動」の表記の違い等、どのような表記がよいか再検討したい。また、アンケートの中で、児童・生徒の実態差が大きいグループの場合、評価がしにくいという意見があった。単元別指導計画表はあくまでも授業を行っていく上での目標や評価を表記しているため、個別の手立てや留意点などについては、個別の指導計画を活用し関連させることが必要である。長期的な視点に立って、単元別指導計画表を作成していくだけではなく、個別の指導計画とどのように関連させていくか、検討する必要がある。

目標設定についても、どのようにすればよいか分かりにくいという意見が多くあった。新学習指導要領の三つの柱に基づいた目標・評価の設定の難しさを感じる先生方が多く、特に「学びに向かう力・人間性の涵養」の目標設定が難しいという声が多かった。目標設定では、新学習指導要領から目標・内容表を参考にして考え、授業者がどのように児童・生徒を育てたいのか、“願い”や“思い”を踏まえて授業者が考えて具体化していくことこそが、カリキュラム・マネジメントを運用したり、単元別指導計画表を作成したりしていく上で最も重要である。今後も新学習指導要領の勉強会・研修会を継続して行ったり、単元別指導計画表を具体的にどのように作成していくかをマニュアルに基づき確認したりすることが必要である。

次年度、教務部が中心となって実施する「校務支援システム」については、単元別指導計画表を作成していくことと重複する部分が多く、個別の指導計画、目標・評価や年間指導計画にどのように反映させるかなど、どのような協力・連携が図れるのか長期的な視点で検討していく必要がある。

カリキュラム・マネジメントは管理職や一部の教員が行うものではない。単元別指導計画表を作成していくことは、授業を考えていくことで、正に学校全体のカリキュラム・マネジメントへとつながる。カリキュラム・マネジメントを進めていく上で大事なことは、教員一人一人が「今の学びがこれからの学びにどのようにつながるか」を考え授業を組み立てていくことである。児童・生徒の頑張りをどのように「評価」していくのか、単元別指導計画表は授業の計画－実践－

評価－改善のサイクルの中で蓄積される学習評価に基づき、教育課程の評価・改善に臨もうとする視点が重要である。今後も単元別指導計画表を作成し続けていくことで、「よりよい授業」をつくり、「社会に開かれた教育課程」の完成を目指していきたい。

<引用・参考文献>

- ・長崎県立佐世保特別支援学校（2018）：平成30年度 研究のまとめ
- ・長崎県立佐世保特別支援学校（2019）：令和元年度 研究のまとめ
- ・分藤賢之（2017）：「特別支援教育の観点を踏まえたカリキュラム・マネジメント」特別支援教育 68号 東洋館出版社
- ・中村大介（2020）：「学校経営の柱としてもカリキュラム・マネジメント」特別支援教育 749号 東洋館出版社
- ・朝日滋也（2020）：「カリキュラム・マネジメントを進めていく上で求められる校長の役割」特別支援教育 749号 東洋館出版社
- ・鹿児島大学教育学部 肥後祥治 他（2020）：子どもの学びからはじめる 特別支援教育のカリキュラム・マネジメントー児童生徒の資質・能力を育む授業づくりー ジアース教育新社
- ・菊地一文：平成30年度長崎県立佐世保特別支援学校講師招聘研修会資料